

「後藤榎根を顕彰」し続ける

後藤 弘子

(1) 顕彰出版とならねっ子まつり—子ども文化の花咲く町づくりを目指して

後藤榎根顕彰本の執筆に携わったのは、2005年から2007年にかけてである。4校め5校めと、年末年始もなく、はさま未来館司書の坂本敦子さんと校正に根を詰めたことも、今は懐かしい思い出である。2007年2月1日、本の出版とともに顕彰委員の仕事も終わると思っていたが、いまだに仕事は続いている。

由布市挾間町下市出身の童謡・童話作家後藤榎根（1908～1992）の功績をまとめた顕彰本『後藤榎根』の出版記念式典がはさま未来館で開催されたのは、2007年2月3日であった。まず、榎根の甥・二宮壽氏（挾間町下市在住）が寄贈された石碑（「今日の児童文化が明日の祖国文化をつくる 榎根」と刻まれている）の除幕式がとりおこなわれた。式典後、パワーポイントとナレーションで、榎根の生涯を偲んだ。その後、「榎根談義」に移り、元大分大学教授の後藤惣一先生を座長に、児童文学者 西本鶏介氏・文教大学人間科学部教授 秋山胖氏・顕彰委員会委員 二宮壽氏と榎根ゆかりの方々にご登壇していただき、榎根のなつかしい話、あまり知られていないエピソードなどを語り合っていた。翌4日も榎根を顕彰し、読み聞かせ活動の輪を広げようと、「由布市読み聞かせフォーラム」が同館で開かれた。基調提案の後、「子どもへの読み聞かせ活動をどう進めるか」をテーマにパネルディスカッション。由布市学校図書館協議会長の小学校長・読み聞かせグループ代表・保護者代表のパネリストたちと細かな打ち合わせを繰り返したが、合間の雑談の余滴が大変参考になった。この後、榎根と親交の深かった児童文学評論家の西本鶏介氏の講演があり、そのなかで、氏は、榎根を「昭和のアンデルセン」などとありふれた名で称するのではなく、「児童文化の父」とするのがもっともふさわしい、と提言してくださった。「昭和のアンデルセン」では、玖珠町に「日本のアンデルセン 久留島武彦」の存在があり、何かしっくりこなかったのが、このご指摘はありがたかった。当日は、県内各地のPTA関係者や読書ボランティア、図書館司書等180余名の参加があった。

関係者の気運が高まって「後藤榎根記念第一回ならねっ子まつり」が開催されたのは2008年2月9日のことである。活動テーマは「榎根が目指した児童文化の具現化」である。オープニングは子どもたちによる榎根童謡「ぼくんちには ぼくがいる」（田村徹作曲）「空の羊」（藤田幹子作曲）。開会式後、大分県文化振興県民会議会長・大分大学教授豊田寛三先生による講演「大分県の文化振興—近世大分の文化の視点から考える—」。ついで、ビデオによる「榎根の生涯と作品」の上映。並行して実施された昭和のおやつ・給食のコーナーや子どもたちによるお茶席、昔の遊び、押し花・マンガ教室はお年寄りや親子ずれで賑わい、綿菓子担当のお年寄りが「千客万来」と喜びの悲鳴をあげるほどだった。講演依頼やあいさつ回りで苦労をともにした山月美江子館長と安堵の喜びを分かち合った。私自身

一番気になったのは、湯布院町（おはなし「きびだんご」と「このゆびとまれ」）・庄内町（「秋桜の会」）・挾間町（「由布市立図書館協力クラブおはなしボランティア」）の協働による「おはなしの部屋」である。これを機にグループ相互で交流を深め、切磋琢磨して一層「読み聞かせ」の実力を高めてほしい、という思いがあった。前日から未来館 2 階の大研修室はカーペットが敷かれ、色彩も鮮やかにかわいらしい装飾があふれて、担当者の熱意が伝わってきた。当日は、腹話術による場面転換や音響効果も工夫されて、幼児からお年寄りまで大型絵本朗読、パネルシアター、紙芝居、ブラックシアターと多彩な出し物で充実していた。取り上げられた榎根作品は朗読「春をまつどんぐり」紙芝居「かえるとお月さま」歌「かえるの歌」で、挾間町が受け持った。

第一回の反省を踏まえて、第二回ならねっ子まつりが開催されたのは、2009 年 3 月 14 日のことであった。2 月の開催は、湯布院町塚原のお話ボランティアグループが雪のため前日から泊りがけになったこととお年寄りの参加が想定以上に多く、もっと暖かくなってからという要望があり、さらに翌日の未来館まつりとくっつけることで、影で支えていただく食育グループなど地域のボランティア活動者の負担軽減のためである。第 2 回の特徴は、由布市役所演劇部による榎根作品「千里眼物語」・庄内町秋桜の会によるパネルシアター榎根童話「ハトの歌のものがたり」の上演である。「千里眼物語」はアドリブで会場が笑いの渦になり、期待にこたえて今年も熱演することになっている。劇中に子どもコーラスを取り入れ、榎根作詞の「空の羊」「めだか」が披露された。「ハトの歌のものがたり」は手本になる挿絵がなく、大変苦勞したという話であったが、美しいイラストが語りと一緒に、前年の「鶴のおんがえし」とともにグループのすばらしい財産になった。また、古本市も新たに設け、学校や地域図書館の除籍本の販売（1 冊 10 円）、喫茶「ならね」の開設等々新しい試みも順調だった。榎根紹介コーナーでは二宮寿氏のご尽力により榎根の絵本や挿絵の原画を展示、豊府中学校が総合学習「大分の先哲」でポスターセッション用に作ったポスターも掲示した。氏が準備した「後藤榎根少年物語」の冊子は、あつという間になくなった。

一方、顕彰記念式典以来、市内小中学校の図書館に榎根コーナーを設置したり、二宮氏の執筆により榎根のエピソードを市報に連載したりと、榎根顕彰の活動が続いている。

今年度も 3 月 14 日、第 3 回ならねっ子まつりを開催の予定である。

実行委員の願いは、児童文化の父「後藤榎根」を顕彰することを通して、由布市を「子ども文化の花咲く町」にしていくことである。

第 2 期大分県先哲叢書の出版は、野上弥生子で終わる。大分の先哲は、まだまだ顕彰されていない人物がたくさん存在する。第 3 期の開始まで、いや、30 年 50 年先を見据えて、地域で先哲の記憶を掘り起こし、記録を集積し、語り継ぎ読み継いでいく必要があると考えている。

(2) 榎根と大学図書館―「児童文庫」と「あいのみ文庫」―

後藤榎根顕彰委員会の由布玲二委員長から、顕彰本の執筆依頼があったとき、失礼にも「滝口武を尊敬しています」と、やんわり断ったつもりだった。置いていかれた『後藤榎根の世界』（日本童話会編）を読むうち、自分の認識不足が恥ずかしくなった。敗戦前後の榎根を取り巻く人々は、目も眩むようであった。北原白秋、サトウハチロー、当時児童文学の三種の神器と称された小川未明・浜田広介・坪田譲治、さらに石井正司、石森延男、波多野完治、倉澤栄吉、育てた作家は長崎源之助、さとう さとる、いぬい とみこ・・・と枚挙に暇がない。榎根はこのような人物といつ、どのような交流をもったのであろうか。書きたい、というより知りたい、と思った。恐る恐る顕彰委員会に出席した。由布先生、二宮壽先生、二宮修二先生と第1章の「後藤榎根の生きた道」（伝記）担当ということだった。ところが、後藤惣一先生の鶴の一声で、第2章の「児童文化活動とその軌跡」（評伝）担当に変更。教師榎根の1章を受け持つことになった。教師は榎根の一生で比較的短期間であり、エピソードも多々あり、書きやすいと思っていたら、堀泰樹先生（大分大学教授）が年表と教師榎根を分担する、という。結局、第4節「児童文化人 後藤榎根」と第5節「森を育てる人 後藤榎根」を担当することになった。困った。『後藤榎根の世界』以外、資料がない。本人の他だれも東京に出奔した（1938・30歳）榎根、日本童話会の設立（1946）と機関誌『童話』、大学教授榎根（1968～1992）を首尾一貫して書いた人はいない。さいわい山月館長の勧めもあって、8月末埼玉県文教大学と静岡県文学者の墓を訪れることができた。大学では榎根と研究室が隣り合っていた教授に会えたり、また大学図書館を視察、資料等の貴重な情報を入手できた。こちらの準備不足で、宝の山を前にしながら発掘は満足のものでは、到底ない。時間ももっと必要だった。

榎根は1968（昭43）年、立正女子大学（文教大の前身）家政学部の児童学科新設により専任講師として就任した（当時の小尾学長への、石森延男の推薦による）。60歳だった。1976年、榎根は文教大学人間科学部教授として、1983年定年退職後も非常勤講師として教鞭をとり続けた。榎根が、「文教大学父母と教職員の会」「文教大学藍蓼会（同窓会組織）」（いずれも榎根が設立した）等もふくめて大学の職務一切を退いたのは1988年、80歳のときであった。4年後、榎根は永眠する。この間榎根は日本童話会会報「童話」の編集を、亡くなる2日前まで継続している。

前置きが長くなった。まず、「児童文庫」について述べたい。

1982（昭57）年4月の「図書館だより」No.4に、榎根の「これまで、これから」という文章がある。それによれば、大学図書館では他の学術書をそろえるのに手いっぱいらしく、児童文学の本がちっとも増えないので、自分の本を解放し、研究室の一角に書棚をしつらえて児童文庫にした、とある。榎根には当時寄贈本だけでも毎月20～30冊あり、それもすべて運び込んだようだ。人間科学部ができると研究室が手狭になり、文庫を図書室に委託した。これによって、児童学科の学生だけでなく、それまで気兼ねしていた教育学部の学生も児童文庫を活用できるようになった。「児童文庫を本当に生かすには、読む一から一歩

進めて、どう読ませるか—に及ばなければなるまい。読書指導の領域まですすまなければならぬ」と述べている。

後に続く「係から」には、この児童書が 2300 冊余りあり、「後藤文庫」と呼んでいること、近い将来、現在では手に入りにくい貴重な戦前・戦後の資料も整理されて、配架される予定であると告げられている。今も、楢根の寄贈書は教育学部、人間科学部の国語教育、児童文学・文化、児童教育の研究資料として大切に保管され、学生や研究者に活用されている。

それだけではない。

大学図書館の奥、神社に通ずる小道を挟んで「あいのみ（藍の実）文庫」がある。毎週木曜日の午後、幼児・小学校低学年を対象に、地域の子どもたちや母親のために解放されている。運営に当たるのは図書館員・母親・学生有志である。

前掲の「図書館だより」に「あいのみ文庫の誕生」という一文がある。川上蓉子氏は、そこに「本学の図書館は、新館建設にあたり『地域社会に開かれた大学図書館』の構想を基本理念としてきました。その一枝としてあいのみ文庫は誕生したのです。」と書かれている。当時としては斬新な発想、「児童室の地域への開放」という思いきったことを実現できたのは、楢根の「児童文化への長年のご実績と深いご理解があったればこそ」なのであった。

文庫は子どもの読書活動・読書指導など児童教育学の実践の場として活用され、豊かな研究素材を生み出している。さらに、文庫をなかだちとして地域との交流という新たな機能を、図書館の一部にもつことにもなった。開設当初は、大学図書館におけるこのような活動は、全国的に皆無に近いといっても過言ではなかった。すべて手さぐりで、大きな不安をかかえての出発であったそうであるが、今日では立派な活動が次々に企画され、展開されている。お話会、紙芝居、人形劇やその勉強会、準備・練習の場として活用され、年間 5～6 回はマスコミの取材を受ける（館長さんのお話）、ということだ。

やはり、楢根は「昭和のアンデルセン」ではなく、巨きな「児童文化の父」に相違ない。

顕彰本出版の後、時間をかけてもっと細部にまで光を当てていくことが必要だと、改めて考えさせられた。

（ごとう・ひろこ 別府大学非常勤講師）